

## 母子関係と集団適応

—事例からの考察—

研究第7部 野田幸江

### I はじめに

自然科学、人文科学を問わず、その著るしい進歩、発展の中で、各分野における専門領域の細分化、及びそれにとともなう、より分化された領域での専門家の台頭は、当然の帰着とも考えられる現在、本来、総合的にとらえられなければならないはずの人間の問題までが、ややもすれば、他の科学同様、細分化され、より専門家と称する者の手にゆだねられようとしている。そして、その傾向は、家庭における育児にまでも及び、保育の専門家である保育者のいる集団への参加志向、及びその低年齢化となってあらわれてきている。確かに都会における遊び環境の著しい悪化。子供の数の減少。母親を迷わす情報の多さ等、現在の育児環境は、母親にとっても、子どもにとっても決して肯定し得るようなものではない。そんな中で子どもは、初めての集団に、どのような適応を示すか。その適応の様態に、それまでの母子関係がどのような影響を与えているのか、それらの検討を行なうことにより、今後の1、2歳児の保健指導に役立てたいというのが、この研究の目的である。

### II 手続き

都内にある某国立大学附属幼稚園3年保育新入園児、クラス全員20名に対し、子どもの行動観察を担当保育者に依頼すると同時に、母親に対しては、子どもを幼稚園に送り込んだあと1人1時間程度の面接を行ない、これまでの育児についての情報を得る。

情報の収集は、後にあげる7つの側面を中心に比較的自由に話してもらいと同時に、その事実を母親がどう受取っていたかについても出来るだけくわしく語ってもらうように心がけた。

面接のポイント

- (1)健康 (2)住居環境 (3)家族関係 (4)発達の様

相 (5)性格 (6)生活習慣 (7)母親自身の生いたちである。

資料収集の期間は昭和56年4月～5月、及び57年3月である。

### III 結果

子どもの行動評価を保育者に依頼するということで、日頃親交のある信頼できる保育者を選んだため、被験者にある種のかたよりがあった事は否定できない。

多くの志願者の中から選抜された故であろうか、育児に対する考え方、育児方法、母親の生いたち等、いずれの点でも、それぞれ小さな違いはあっても、一般的に常識といわれるものから大きく逸脱していると思われる母親がいなかった。更に子どもの側も発達上の問題を持つものは皆無であった。しかし、マイペースともいえる行動特徴を持つものが女兒に3人いたほか、全体に母親の報告に頑固という言葉で代表される我の強さを持った子どもが20名の集団の殆んどを占めているのが印象的であった。

そこで今回は、そのマイペースともいえる行動特徴を持つ者2名、入園当初の集団適応に若干の問題をみた者2名について、その詳細を明らかにするとともに若干の検討を加えてみよう。

事例A マイペースともいえる行動特徴をもつ女兒

#### 1. 生育歴

①健康：妊娠・分娩時いずれも異状なし、大きな病気はないが、1歳6ヶ月時、椅子から落ちサッパに頭をぶつけ、頭蓋骨にヒビが入り、額を5針縫う程の怪我をしたほか、小さい怪我が多かった。ただ第2子ともなると母の方があまり驚かなくなっていた。

②環境：マンションの8階、本人が11ヶ月の時、母が3週間入院、帰宅した時、まるで母を忘れてしまった様で随分あっさりした子どもだと思った。

③家族関係：小学校5年生の兄と2人兄弟。ごく普通

の兄弟関係。父親とはベッタリで、今でも毎日罷、本人が要求するままに動物園と自転車乗りにつき合っている。

④発達の様相：身体発達は普通。運動発達は良好、道うことなく始歩は10ヶ月と早く、ちょこちょこよく動く。外食の折、注文してから運ばれてくるまでが待てず、誰かが外で遊ばせ、料理が運ばれて来たところで椅子に座らせ食べさせなければならぬ程だった。

人見知りはまったく無く、普通8、9ヶ月児にみられる母の後追いもまったく見られない。近所に同年齢の女児がいたので、かなり早い時期から遊ばせていたが、始めは一緒にいても15分もたつとバラバラになってしまい、特に嫌がるわけでもないが、友達などはいらぬという感じが強かった。今でも子どもがいると、「お友達になりましょう」等と声をかけるが、ついて来てくれない事が多くそれでも平気である。

動物園へ行っても自分が見たいものところへ走り、満足すれば次のところへ走り、父はついて来てくれるものと信じているのか後を振り向く事もない。母としては何とかして着いた子どもに育てようとしたが、どうしようもまいかなかった。

始語はやや遅く2歳頃。今でも貰ったといわずにあげたという様な間違いをする。2歳半頃から文字は全部おぼえ本をよく読む。

⑤性格：放浪癖があり、1人でどこへでも行ってしまふ。デパートで手を放すと、何処かへ行ってしまい、2回迷子になったことがある。少し大きくなってからは、15分位たつと必ず元の所へ戻って来るようになってはきたが、外を走っている時、或いは気に入った事をしている時には名前を呼んでも知らぬ顔の事が多い。

頑固で一旦いい出したらなかなか後に引かず、デパートで屋上へ行きたいといい出したら、何が何でも行ってしまい、一応全部まわってみて納得すれば母の行きたいところへもついて来る。そんな時、母としては本人が納得するまでつき合うしか仕方がなかったという。

暗やみもこわがらず、赤ちゃんの時からCMを好む等ユニークな子どもだと思っていた。

⑥生活習慣：授乳・離乳に関しては問題なし。母親の態度も一応のきまりを守るよう準備はするが、後は本人の判断にまかせるというやり方で、授乳に対しても、現在の野菜嫌いに対しても同じ方法がとられている。排泄に関しても特に問題なく、おむつも1歳半でスムーズにとれている。

夜は添い寝。要求するままに10冊程の本を読む。物語りの筋をおぼえるまでは必ずその本が10冊の中に入り、おぼえてしまうと次の本が登場する。

危険な事をした時、言葉使い、行儀などで叱る事もあがるが、あまりききめはない。

⑦くせ：哺乳ビンをいつまでも持っていた。1歳半健診の時注意され、とろうとしたがえって逆効果。母の方が諦めたら2歳過ぎに自分からやめてしまった。しかし、その後爪かみが始まり、これもやめさせるべく色々やってみたが、いずれも効果なく今でも時にやっている。

⑧その他：何処かへ行ってしまふのが恐ろしくて、いつも追いかけていたという感じが強い。父親は女の子という事で色々期待するものはあったようだが、あまりにイメージが違ったらしく、この頃ではすっかり諦めている様子。

## 2 母の生い立ち

干渉されずに育ち、自分の人生を歩ませてもらったという気持が強い。自分も子ども達に負担になるような愛情を注ぎ過ぎないようにと思っている。

## 3 幼稚園での様子

入園当初は、フラッとどこかへ行ってしまふことがあり、降園時、椅子に座らせるのに手がかかる。要求ははっきり表現するが、自分の活動を園の生活の中で充分出せていない様子がみられる。それでもはじめは、他の子どもが遊んでくれていたが、2-3ヶ月して気の合う者同志が遊び始めると、はじき出されている事が多くなる。しかし、その事をあまり苦にしている様子もなく、遊びたいのに遊べないのか、遊びたいとも思っていないのか、こちらに読みとれない。笑顔が少ない。園の生活になれるに従い生活の節目、節目に手がかからなくなると同時に、次第に保育者に対する要求が強くなり、「ブランコを押して」と呼び出ると、保育者がその要求に応じるまで側で待っている。ようやく他の人の助けをかりる事のよさを知ったようである。

## 事例B マイペースともいえる行動特徴をもつ女兒

### 1 生育歴

①健康：まったく問題なし

②環境：兄が同じ幼稚園に入園した時、通園の関係から園の近所のマンションを借り、それまで住んでいた家とマンションの間を行ったり来たりするという落ちつかない生活。6ヶ月後、現在の家に落ちついたのが2歳半のときである。

③家族関係：年長組に在籍する兄と本人が2歳3ヶ月の時生まれた弟との3人兄弟。弟の出生の影響は、キキーという事が多くなったという程度であった。兄弟ともによく遊ぶし、よく喧嘩もする。兄との関係ではどちらかというとなりの方が主導権を握っているかにみえる。

両親ともにあまり子どもが好きでない。1人目は潔癖

ともいえるような育て方をして失敗したと思っている。本人が生まれ、そんな事は云ってられなくなり母の気持ちもややほぐれ、3人目が生まれて、ようやく子どもというものがわかったような気がするという。

#### ④発達の様相：身体・運動の発達とも良好。

最近になって人に対してテレるような事があるが、赤ちゃんの時の人見知りや殆んどない。後追いがあったという印象も薄く、むしろ道を歩いている時はどこかをつかまえていなければならなかった。今でも人に対する好き嫌いははっきりしている。言葉の出はじめは早い方で1歳半であった。

⑤性格：いたづらが烈しく、静かだと思った時は何かをやられていた。押えがきかずやりたい事は必ずやってしまう。明るく、活発であったこと、神経質なところがなく、怒っても後に残らず、こちらが怒った事を後悔するようなことがなかったこと。更に成長が順調であったこと等から育てやすい子どもという印象を持っていた。

感覚はすどい。観察がこまかく、部屋のちょっとした模様や匂いなどがすぐ気がつく。臭いに対しても敏感で、臭いのある物があるとすぐ臭いをかぎに行く。

動物が好きで、ナメクジやミミズ等を平気でつかむ。

⑥生活習慣：食事に関しては特に問題なし。歯の事を考え甘い物を制限していたが、来客の時や、他家を訪問した時、菓子の前を離れず、いくら注意してもきき入れられず、母の方で締め、本人の気のすむようにさせていたことがある。排泄に関しても特に問題はない。

⑦くせ：現在も爪かみがある。指しゃぶりが爪かみに変わった様に思う。やめるよう注意したが一向にやまず、玩具のサンダル等にも噛んだあとがある。

⑧その他：上の子の育児の体験から、なるべく口うるさくいうのはやめようと思っていたが、注意してもきいて貰えない事が多かったせいか、今考えれば叱ったり口うるさく注意していた事が多かったように思う。

本人に対しては、個性的で面白い子どもと思っている。

## 2 母の生き立ち

自分の母は祖父の面倒をみるために嫁に来たようで、ただ、ただ働いている姿が思い出さない。父は一人っ子でワンマンであり、一家の団樂はなかった。そんな家が嫌で大学の時家を出る。そのせいか子どもは自分で育てたいと思っていた。しかし自分自身人に対してべたべたする方ではないので、子どもに対してもあっさりしていると思う。

## 3 幼稚園での様子

入園当初は、大人に依存することも世話をやかせるということも少なく、自立しているという印象が強い、一

方、保育室の隅の方から、その日の保育に使わないためにしまっている物をひっぱり出し、それが何であるかを次々に聞く等、保育者を困惑させる行動が見られる。それは、家でもよくみられる行動との事であった。友達とはよく遊ぶ。

幼稚園の生活になれるに従い、保育者につっかかる様な態度が消え、素直になる。3学期になり家では今まで手のかからなかった子が、今では一番手のかかる子になったと訴えがあり、保育を見学した母親から思いもかけず幸せそうな顔をしているとの感想がもたらされた。

事例A・Bに共通していることは、母親によって「頑固」或いは「我が強い」という言葉で表現されている、他意識の稀薄さであろう。それは2人ともに乳児期から幼児初期に於てみられるはずの人見知り、後追い現象が殆んどみられていないことによって、その片鱗を伺い知ることができる。乳児が自分にとってある意味を持つ母親と、そうでない者とを区別し、それを依存対象としてとらえ得た証拠としての人見知り、後追いが無い事は、それ等の心理機制を獲得し得ぬ本人自身の問題であるのか、或いは母親の側に、その区別を乳児にはっきりとらえさせるだけのものがないかのいずれかが考えられる。そして多くの場合、両者は単独に存在するものではなく、お互いに影響しあっている。即ち、子どもの側に母親に対する特別の愛着を示さない関係の持ち方の稀薄さがあると、それはむしろ手のかからない良い子とみなされ、他に対する関心が開発されぬままに、物に向けられる自己の要求充足への関心がそれにとって変わり、ますます他者に対する関心を育てないという循環に入ってしまうがちである。

事実A・B両者においても、いたづらが烈しい、目を離すとどこかへ行ってしまふ等、かなり大人の手をわずらわせたと思われるにも拘わらず、むしろ母親によって育てやすかったとのとらえが語られていることは、母子の関係の一端を示すものであろう。それは、たまたま両者の母親がいたづら、動きのはげしさ、くり返し等の行動を、それ程困った行動としてとらえていないことによるのかもしれないが、それにも増して、他者に依存する事が少なく、1人でやりたい事をやっていたれば機嫌が良かったため、本人がそこにいる事が大人の負担になっていない事に原因しているようである。

なお被調査者20名のうち、A・B両者を除き、人見知り、後追いともになかったとの報告があった者は、男児において1人もなく、女児において、更に2名にそれが報告されている。そのうち1名は後述する事例Dであり、乳児期における1対1の対象関係の成立が、大きな意味

を持つものであることを示唆している。

その他、一人遊びが好きな事も両者に共通であり、自閉的といわれ集団適応に問題を持つ子ども達と部分的に非常に類似した行動特徴を持っている。即ちAに見られた放浪癖、くり返される遊び、母がしつけたというより、本人自らの力で獲得したともいえる生活習慣。Bにみられるいたずらの烈しさ、感覚の敏感さ等があげられる。

ただ、ABの場合、それ等が集団適応に支障を来たす程助長されなかったのは、彼女らにやはり共通する、(1)その偏りの少なさであるのか、(2)他の発達に遅れがないというよりむしろ正常あるいは早いとさえいえる内在する能力の高さに支えられたものであるのか、(3)2人の母親に共通する、これ等の行動特徴を、あまり問題視せず、極く自然のこととして受け入れ、自分が子どもに合わせて行くより仕方がなかったという柔軟性の故であるのか、(4)集団受入れのごく初期に於て、彼女等を特別視しない保育者の持つ自由さ、彼女等が示すひとつひとつの行動に対する適切な指導があったからこそであるのか。今回の資料だけからでは、それを明らかにすることは出来ない。しかし、いずれにしても他に対する関心が薄い彼女等の場合、他が自を受入れてくれず、主張せずにはいられない、自を力づくでも押えつけられた時、或いは他との快いふれあいを体験し得ぬ扱いを受けた時、これだけの集団適応はみられなかったであろう。A・Bともに、それが可能であったのは、自分を認めてくれる他者との出会い、及び、その他者との出会いを自分の変化につなげるだけの力があったからであろう。いずれにしても彼女等の存在は自閉的といわれる子どもとの連続を感じさせるものであった。

### 事例C 3歳女兒

#### 1. 生育歴

①健康：4ヶ月の時、ひどい風邪をひく、母の実家が医者のためそれ程心配はしなかったが、一時はチアノーゼを起す程で完治するまでに2ヶ月近くかかる。小さい時から素足で歩かせるよう心がけた。母も素足が好きだったこと、学生時代に授業で聞いた接触恐怖症のことが気になったの配慮であった。

②環境：4ヶ月から4ヶ月間、母の実家におり、その時は大勢の大人にかこまれての生活であった。

③人間関係：兄弟なし。

本児が1歳4ヶ月の時、母親が肩を骨折。その後3年間は注意して欲しいということに殆ど本人を抱いていない。母が逃げるのでよけい抱かれたがり、まつわりつく。そのせいか母の足の指が好きで、よく足の指に話しかけていた。その後も母が好きな編物をしてると同じ

ように足の指に話しかけていることがあり、現在でも時々みられる。

父は非常に教育熱心。ある信念を持っていて、母のやり方に対し注意することも多く、周囲から母親が2人いるようだといわれる程である。子どもを叱る事でも、あれこれいわれるので、叱る回数が増えてくると母にとって、父の干渉がうるさく感じられる事もあるという。

昼間、おもらしをすると自分でパンツを洗わせている洗濯が好きなので遊びになっていると思う。その他出来る事はなるべく手伝わせるよう父親にいわれるが、まだ見ていないと駄目な事が多く、母としては、それが面倒で実際には、それ程させていない。

④発達の様相：身体・運動発達ともに順調。8ヶ月頃にみられる人見知り、後追いは殆どなく、むしろ1歳半頃になって男の人に対する人見知りがみられるようになる。友達との関係、遊びなどの発達についても特筆すべきことなし。

⑤性格：祖母が一人で留守番をしていると淋しいからと家に誘う。人の持物などをほめる。煙草を持つとすぐ灰皿やマッチを持って来るなどよく気のつく、社交家。

⑥生活習慣：1歳1ヶ月の時離乳、夜ひとく泣いたが1Wで完全に離乳。4ヶ月からコップを使わせた。外国の雑誌に書いてあったという祖父の意見をとり入れたものである。箸も散らかすことを嫌がらず早くから与えたところ、結構上手に持つ様になり周囲を驚かせた。

排泄の自立も順調。

就寝時は大体3冊本を読んであげる。母が疲れている時は、1冊で納得することもある。本人が5冊用意する事もあるが、そんな時は適当に省略してしまう。

⑦育て方：食べ物を残す、廊下で騒ぐ、おもらしをする、危険な事をする、人前でだだをこねる時等は体罰を使ってでもとめる。デパートでだだをこねられた時は、家の子はしんないと思っただけにショックを受けた。教育的でないと考え、テレビも1歳7・8ヶ月頃までまったく見せていない。しかし、いずれの場合も叱ったことでやらなくなったという感じは持っていない。

着る洋服の選択なども、はじめは母の意見を押しつけていたが、この頃ではあまり押しつけないようにしている。今までは、子どもを自立させるためには、つき離すのが良いと思っていたが、園での他の人々のやり方をみて、むしろ逆で甘やかしてみると素直になり、甘やかさないと自立しないものだということがわかった。

#### 2. 幼稚園での様子

入園当初、母と離れず、1ヶ月近く母も保育室に入る保育室での母親の態度は、子どもがやるうとするより先

に口を出す。保育者が気を向けようと話しかけるとすぐ、「ホラ見てごらんさい」と声をかける。子どもの方は、そうされることによって離されるという感じを持ってしまふようで、両者の間に信頼関係が育っていないのを感じる。やがて場になれて来ると少しずつ離れる様になるが一旦離れると、友達へのいじわるがみられる。遊んでいるところに来た友達に「入れてあげない」等とっている。自分がいわれた時は、いち早く母のところへ逃げる。

その後の変化としては、声の出し方がやさしくなり、母親も本児と話すのが楽しくなったとっている。母親のやさしさを引出せる子どもになってきたのだろう。

#### 事例D 3歳男児

##### 1 生育歴

①健康：母親が呼吸器が弱く本人もその傾向を持つ妊娠時異常なし。分娩は逆子。医者にもおどかさされ、母親自身心配症だったこともあって出産まで不安だった。姑が胃弱であったことが健康に関する育児にかなりの影響を与えている。

##### ②環境：父方の祖父母と同居

③人間関係：小1年の姉と、S55年4月出生の妹との3人兄弟。姉は本人が生まれた時、「赤ちゃんのバカ」等とっていたが、妹の出生に対し本人は何もいわず、いじめる事もなかったが、出生前より夜尿が始まり、妹が2〜3ヶ月になった時には、筆筒の陰でポーッとしていたことがあった。

最近、何でも姉の真似をするようになり、すべて姉と同じでないと不満を示す。姉を叱ると僕も叱ってとまでいう。父は子ども好きでよく遊ぶ。祖母は神経質で、子どもが家に遊びに来るのをあまり歓迎しないようなところがある。子どもの扱いについて母と祖父母の意見が大きく食い違うことはない。

④発達の様相：決して早い方ではないがすべて順調。9ヶ月頃から人見知り、1歳過ぎには母が祖父でなければならないことが続いた。2歳を過ぎる頃から良く話すようになる。人なつこく子どもがいればすぐ飛んで行く。来客も多く大人に対しても愛想がよく、皆から可愛がられている。

⑤性格：入園後かなり変わったように思う。以前は積極的であったが、最近では友達が遊んでいるのを、じっと見ていることがある。遊具で他の子どもが遊んでいると、遊びたくても入れてと行って行けないようなところが出て来た。また、人を画きたいけれどお化けのような人しか画けないから等といたりしている。

小さい時から頑固なところがある。頑固さに出会うと

わがままになると困ると思ひ、徹底的に叱って来た。叱り方は、まず外に出し、少したってから開け、その時謝れば許すが、謝らなければ謝るまで外へ出して置くというやり方で、最近では、謝らなければどうにもならないという事がわかったのか、すぐ謝るようになった。

⑥生活習慣：乳児期は問題なし、1人で食べたがる時期、他の子どもが手づかみで食べるのを見て母が嫌悪感を持ち、その気配を感じた時はとりあげていた。

姑が胃弱で、子どもも胃が悪いと風邪を引きやすくなるといわれ、呼吸器系が弱いこともあって、甘い物を一切食べさせなかった。菓子を買うということもなかったが、2歳過ぎともなると頂きものの菓子を探してまわり食べるようになる。その頃まで哺乳ビンを持っていた。

1歳4ヶ月で、おむつをとろうとしたがとれず、1歳8ヶ月の時、特に何をしたというわけでもなくとれる。

就寝時は必ず犬のぬいぐるみを持って寝る。夜中によく母の床に入って来る。戻すと又来ているということがくり返されている。

⑦育て方：わがままになると思っただけ菓子や玩具などは自分から云い出したものは、その時には絶対買ひ与えない。人を傷つけることを云った時は徹底的に叱る。母自身本人に鬼といわれることがあるが、口で注意するだけではなかなか改まらないので、つい烈しく本人を攻めることになってしまう。ただ、上の子での経験から、「時期がくれば治る」と考えられる様になってきている。しかし自分でもこんなにおくる母親になるとは思っていないかった。

##### 2 母の生い立ち

母が時間に関しては特にうるさく、よく母にどなられていたもので、自分はやさしい母になろうと思っていてた。

##### 3 幼稚園での様子

入園当初は落着きなく、動きが断片的、自分のやりたい事を自信を持ってやっていない様に思える。特に孤立しているというのではないが、グループへの所属感稀薄である。

2学期になり落着いて遊ぶようになると同時に、小さいおとなしいグループに入り、よくはしゃいでいる。はしゃぎ始めるとはめをはずしてしまうことが多い。大きな声で朝の挨拶をするが、自分の気持の表現というより努力して云っているという感じの方が強い。

事例C・Dは入園当初、母と離れられない、落着きがない等、集団適応に問題を持ちながらも、その後の集団適応状態に大きな変化をみた事例である。これ等の例に共通していえることは、入園当初の子ど

もの様子が、それまでの生活からは予想もし得ぬものであったこと、母親によって語られたこれまでの育児に、親の価値観の押しつけが強く感じられたことである。Cに対してみられる、親の考える自立を目標とする要求の高さ、Dにみられる、わがままと思えた時の徹底的な叱り方などのもたらした影響を無視することはできないであろう。

Cの場合、家庭とその周辺という限られた範囲の中では、親の価値観の実現のために振舞い、承認されて安心していたことも、一旦、家庭とは異なる枠組を持つかも知れない、より広い社会に出たとき、その新しい枠組を指示してくれていた母の所へ逃げ込むことによって、直面した不安から身を守ろうとしたと考えることは出来ないであろうか。全面依存の乳児期から自立へ向う発達の中で、まず子どもが獲得しなければならないのは、自分と一番深いかわりを持つ者との信頼関係である。それは獲得しつつある能力を十分に自分のものとし、それを駆使することによって得られる自己充実感を十分に感じさせてくれる大人との間に作り出されるものであり、幼児期の自信ともいえるものである。その自信が育っていないところに、新しい経験を自分の中にとり入れようとする積極さより、逃げることによって自分を守ろうとする消極さがあったと思われる。それは、やがて集団になれるに従い、友達に対し支配的な態度をとるようになったことによっても伺い知ることができる。即ち、獲得した能力を他に示すことによって得られるはずの万能感も押えられがちであったCが、今までとは違った力関係の中で支配的な行動をとる事によって自己の力を再確認しようとしている現われとみることは出来ないであろうか。そんな時、ただそれを否定するだけの大人ではなく、拒否された子どものために「誰が入れてくれそうかな」との援助を与えた保育者の言葉は、Cに相手を受け入れることによって得られる自己実現の快さを体験させたようであった。

事例Dにみられる自分より優れた存在である姉との同一化への願望、描画にみせた自信のなさ等も現象こそ違え、その機制は根を一にするものであろう。即ち、自発的な動きを承認される経験の乏しさは、動きに自由さを持つ子ども達の中では自分自身に対する無力感となってあらわれがちである。

なお、母親の強さに影響を受けたC・Dと、母親をして、自分が変わるを得なかったと云わしめたA・Bの強さに、あらためて母子関係の成立の複雑さ、集団適応のあり方の違いを与える因子の多様さを感じる。

### Ⅲ おわりに

集団適応と母子関係との関係をできるだけこまかくとらえたいとの考えから、個別面接という手続きをふんでの調査であったが、やはり過去をふり返っての情報は、ある限界を感じた。

ただ、20名中にマイペースとも思われる子どもが3人も含まれていたことは、たまたま出現したことであったのか、そういう子どもたちの存在が多くなって来ている事を意味するものであるのか、これから注目していかなければならない問題ではあろう。

また母親の受けた養育体験が、何らかの意味で現在の母親の育児態度に大きく影響を与えていることは、殆どどの母親が認めているところである。即ち、肯定的にとらえている者が、それを踏襲しようと考えている事はむしろ当然のことであるが、自分こそは、そうなるまいと考えているにもかかわらず、同じ様な態度をとっていることに驚いたとの報告が多かったことは、育児が決して、その場限りのものではない事を物語っており、その持つ意味の重要さを、これからの保健指導に生かして行かなければならないと思う。

### 要 約

都内の〇幼稚園3年保育に入園した園児20名につき、集団適応の状態、及びその変化をとらえると同時に、母親との面接により、各人の乳児期からの母子関係を分析、先の観察結果との照合を行ったものであり、今回はそのうち特徴のあった4例についての報告である。

2例は、マイペースともいえる女兒であり、乳児期から集団適応には、ある種の問題を持つたろうと思われる行動を多く示しているにも拘らず、意外に良い適応を示した例であり、その要因として、

- ①本人の偏りの少なさ。
- ②本人の内在于る能力の高さ。
- ③母親の持つ柔軟さ。
- ④集団の受入れの良さ。

等が考えられる。

なお、20名中、3名にこれ等の特徴がみられたことは注目すべきことと思われる。あとの2例は、入園当初の子どもの様子が、それまでのものとはあまりにも違う2例であり、そこに共通にみられたものは、母親の育児に対する考えの押しつけであった。

最後に快く調査に応じて頂けた20名のお母様方、及び担当の保育者に感謝の意を表したい。